

4-3【実践6】「地域」の学習と人権の学び合い

～H高校の実践～

1. 「箱型」の学校空間から地域へ

なぜ「学校」という空間は、ともすれば息詰まりやすいところになってしまうのだろう。なぜ自由な発想が飛びかい、生き生きとした会話がはずむ場所にはなりにくいのだろう。最も大切なことそれは、教える人の魅力と教わる人の興味・関心であろう。

「箱型」の学校を打ち壊し、学ぶ場所をさまざまな所に求めていこうという考えが、『地域』授業を生み出したといえる。学校の外には、さまざまな生きた教材がある。それを、どんどん授業の中に組み込んでいく。学校の方針を講師となる方々に理解してもらい、授業を創造していくのである。「こんなものを授業として単位として認めていいのだろうか」という疑問も出てくるが、創造的授業への第一歩として試行錯誤しながら進めている。そして、そこには、人と人のふれあい、自然とのふれあいから、「人権」を学び合う場と機会がころがっている。

2. 「地域」授業とは

この授業は、教室での座学でなく、学校外での体験学習が中心である。講師については公民館、社会教育、生活改善グループなど、地域から多大な協力をいただいている。

2単位の『地域』を週3単位もの（A週）と1単位もの（B週）に分け、実施している。

【1単位の授業内容－主に学校の中で】

- 先輩談…美容師、大工、自動車整備工、短大生、大学生など
- 社会人講師…漫画家、ギター奏者、盲学校の先生（点字）など

【3単位の授業内容－学校の外にとび出して】

- 乗馬体験…飯綱高原にて、馬の簡単な世話と乗馬
- りんご栽培体験…オーナーりんご園でのりんご栽培
- そば打ち体験…三水村のお年寄りによる指導のそば打ち
- おやき作り体験…三水村のお年寄りによる指導でのおやき作り
- 座禅体験…三水村のお寺で、座禅の講義と30分程度の座禅体験
- ヨガ体験…地元でヨガ教室を開いておられる人を講師に招き、動きの活発なヨガ体操を教えてもらう
- 苹果（ビンゴ）染め体験…りんごの皮を使っての染め物作り
- 飯綱権現太鼓打ち体験…牟礼村の公民館にて権現太鼓打ち
- ジャム作り体験…三水村の農場でのいちご・ぶどうジャム作り
- 福祉ボランティア体験…地元のデイサービスセンターや老人ホームでの老人介護と奉仕活動
- 手話体験…老人ホームの所長の指導による手話

- 北国街道・歴史館巡り…街道を歩いたり、歴史館を見て郷土の歴史を学習する
- 三水用水の歴史…バスで三水用水を辿りながら、用水と村の深い関係を理解する
- 石器作り体験…野尻湖博物館の学芸員による指導で、ナイフ型石器を作る
- 専門学校見学…長野市内の情報・理美容・調理関係の専門学校を見学、講師による学校案内と簡単な体験入学を実施する

3. 人権の視点から

こうした「地域」授業の様々な活動の中で、社会を支えている地域の文化や伝統に触れたり、命の尊さや実践することの喜びを感じることができる。また、互いに生き生きと活動する姿を目にすることによって、一人ひとりの個性を認め合い、支え合いが生まれると同時に、地域の人たちも生徒達のよさやすばらしさを知ることができるだろう。

さらに、意図的に人権にかかわりのある活動を取り入れることによって、相手の立場を理解し、共に生きる大切さを学ぶことができる。

4. 授業の展開例

点字学習

盲学校の先生の指導による点字学習。点字の歴史の講義を受けたあと、実際に文章を作ってみる。教室内に「カタカタカタ」という音が響き渡り、生徒たちは点字作業に集中する。授業担当者も、生徒の中に混じって作業に集中する。講師の先生は、一人一人にアドバイスをしながら、机間巡視。「先生、“っ（小文字のつ）”はどう打ったらいいんですか」というような質問も出る。最後は、ヘレン・ケラーが使っていた点字機や現在の日本製の機械が紹介され、一部の生徒に実際に打つ体験をしてもらう。

そば打ち体験

地元の主婦からそば作りを教わる。そば粉とつなぎの配分を教わり、各自でこねる。うまくいかずいらつく生徒も。そばを切る場面では、主婦の手さばきの鮮やかさに感動。切り方を教わりながら慎重に切っている。一方、意外と普段突っ張っている子が上手な包丁さばきを示している。さりげなくほめると、照れながらも喜んで切っている。自分で打ったゆで立てのそばの味は格別で、友達同士で味を比べ合っのそば談義も見られた。

乗馬体験

3～4人のグループに分かれて、それぞれ指導者について馬の毛並みを揃える世話から体験学習は始まる。馬を目の前にし、動揺して近づけない生徒も出てくる。恐怖心を取り除きながら、馬との触れ合いを作っていく。そして、引き馬で馬場を5～6周する乗馬体験に入る。馬上で、誇らしげに満足顔でいる生徒の姿を、写真撮影。後半は、競技に出場している騎手の模範演技を見る。終了後、いとおしむように馬の手入れをする生徒も見られた。

福祉ボランティア体験

デイサービスセンターでの老人介護体験。8～9名ぐらいの人数で訪問。最初に、セン

ターに勤めているボランティアコーディネーターの人による講演を聞く。その後、食堂でさまざまなレクリエーションをやりながら、老人との会話が弾む。「どこに住んでいるのですか」「若い頃の話をしてください」「知っている歌を歌ってください」と、生徒たちはためらいながらも悪戦苦闘して会話を続ける。そして後半は、車イスを押して散歩に連れ出してあげる。お互いに暖かいひとときである。

5. 教える側の発想転換

日々の授業を積み重ねている我々教師にとって、マンネリが最大の敵である。生徒たちの授業態度を責める前に、教材研究を絶やしてはならない。「1時間の授業に、最低2時間の教材研究は必要である」この言葉が重くのしかかってくる。そんな毎日の中で、「地域」の授業は発想の転換を教えてくれる。たとえば社会人講師の話や先輩談を教室の中で実施するとき、授業担当者が講師にさまざまな質問をして進めていくパネル・ディスカッション方式をとる。この方式をとるには、授業担当者自身が、講師の話に対して興味・関心を持つ必要が出てくる。教える者の心に最も大切な“好奇心”を呼び覚ます。好奇心は、その人の顔や言葉を生き生きとさせてくれる。マンネリ化した自分の発想をもう一度しなやかにしてくれる体験となる。また、生徒たちと共にさまざまな体験をする中で、自分自身の殻を破ることができ感性豊かな顔に変身できるのではないか。

ところで、授業の面白さは授業テーマへのアプローチの仕方によることが多い。豊かな発想力とは、さまざまな視点でテーマにアプローチする力のことをいう。学校という常識の枠を外れた所での体験学習である「地域」授業は、教える側にとって心と体に柔軟性を取り戻す時間と場所を提供してくれる。塀に囲まれた学校、壁に囲まれた教室、自分の教科だけに囲まれた授業など、閉鎖的空間を突き破り、いつでもどこでも誰からでも学ぼうという空間を「地域」授業は創造する。

6. 教わる側の発想転換

教室があって、教壇があって、黒板があって、そこに先生がいて…。この学校というイメージを多くの生徒たちは抱いている。その教室に、社会人講師がどんどん入ってきて、生々しい体験談を語ってくれる。部外者には警戒心を抱く学校が、塀を取り払って招いてくることによって、生徒たちは、社会の風をじかに感じるができる。また、午後3時限連続の「地域」授業では、座学では考えられない刺激と驚きと開放感のある授業が展開される。特に、1年生の時期というのは、学校に魅力を感じられなくなり、精神的にも不安定になる。そこに「地域」授業が少しでも学校に目を向けさせるものになりはしないか。

アンケート結果を見ても、確かに生徒たちは「地域」授業を楽しみにしていることがわかる。特に、講話や見学よりも実地体験に人気が集中する。目で見ても、触れて、作ってみる。今の高校生の生活の中で最も欠けているものを「地域」授業の中で体験することができる。

7. 授業作りの楽しさ

「地域」授業を編成していくときに、楽しいことは、教材探しである。地元の公民館報を見たり、教育委員会に出かけてみたり、地域の市民新聞にも注目してみる。すると、なにかしら見つかるのである。「これは、面白い」という教材を見つけた時は、まさに石ころの中から宝石を見つけたような気分になる。

次は、その社会人講師となる人との接触である。まず、電話でアポイントメントをとり、学校の考えを熱く語り、理解していただく。そして、実際にその人の所に出かけて行き、授業内容の検討が始まる。3時間連続の授業の場合は、講師の方も大いに悩んでしまう。どのように時間を配分したら、生徒たちを飽きさせず楽しい体験学習にすることができるか。我々が日々の授業で悩んでいることと同じ状況が生まれてくる。そこで、講師との共同作業で授業が創造されていくことになる。さて、授業の流れといえば「導入・展開・まとめ」である。「導入を何にするか」「この体験学習で、生徒たちに一番伝えたいことは何か」などなど。手作り授業の共同作業をすることが、とかくマンネリに陥りがちな自分の授業に対する気持ちを切り替えてくれる。新鮮味をもって授業というものを考える気持ちを復活させてくれるのである。